

まえがき

本書『加藤新太郎×中村直人 法律家とキャリア』は、裁判官・弁護士として50年になる私と弁護士として40年になる中村さんとの対談本である。本書刊行の端緒は、NBL誌が1300号を迎えることを記念して、編集部から、この時期にふさわしく、読者にもアピールできるテーマについて相談されたことにある。

私は考えた。NBL誌の読者層の中核は弁護士・裁判官、企業法務マン、行政官、研究者、司法書士など New Business Law の担い手である。そこで、その中の多数派である弁護士が、どのようにキャリアを選択しているのか、どのように自らのキャリア・ディベロップメントを図っているのか、どのようなスタンスで仕事を受け次につなげているのか、さらにはキャリア・プランニングをどのようにしているのか、などキャリアパスをテーマにするのがよいのではなかろうか。同様に、民事裁判官についても、それに対応する形でキャリア・プランニングの実相を披露することが弁護士層の日常の執務の役にも立つはずである。裁判官層に対しては批判は喧伝されるもののあまり実相が知られていないので、そうした点も加えるとよろしいのではないか。そうすると必然的に対談という形式になる。

編集部にそう申し上げたところ、「対談のお相手はどなたがよろしいか」。

私の返答は、「中村直人さん一択です」。

なぜ中村さんかというと、自らが創設者である中村・角田・松本法律事務所（NTM）がとても上手くいっているのにもかかわら

ず、そこを惜しげもなく辞めて、また個人事務所に戻るとはどういうおつもりか、大変関心を持っていたからである（日本経済新聞2023年7月3日付朝刊「企業法務の雄、中村直人弁護士に聞く」〔聞き手児玉小百合〕参照）。また、言わずもがなであるが、中村さんは、商事法務から『取締役・執行役ハンドブック〔第3版〕』（2021、共著）、『株主総会ハンドブック〔第5版〕』（2023、共著）、『訴訟の技能——会社訴訟・知財訴訟の現場から』（2015、共著）、『ガバナンスを語る』（2025）、『新装版 弁護士になった「その先」のこと。』（2026、共著）ほか多数の法律書を出されており、裁判実務においても当代一流の会社法専門の弁護士だ。加えて、私はかねてより、中村さんを大層率直な方だとみていた。その理由は、長くなるので、本書第1章の冒頭で述べる。

そのような中村さん一択の理由を話したところ、編集部も大賛成で、ご多忙を極める中村さんに、私が恐る恐るお願いしたところ、幸いにもご快諾いただくことができた。

いざ対談を行ってみると、裁判官と弁護士のキャリアプランについては私も中村さんも、とても数時間では語り切れない内容が、次から次へとあふれ出てきた。そこで刊行されたNBL誌の対談内容を起点としながらこれに新たな編集を行いつつ、それぞれのキャリア開始から中堅期、ベテラン期に至るまでの法律実務家としての足跡について、あらためて語り合う機会をもち、書籍として世に送り出すのはどうだろうか考えるに至った。このような私の提案に中村さんは即座に賛同してくださった。そのような次第で、2025年の初秋から暮れまでの間、日本橋の商事法務の会議室において、都合6回にわたり文字通り談論風発、クリエイティブかつ至福の時間を過ごすことができたのである。

結果として、専門的職業人である弁護士・裁判官が自己のキャリアをいかにして形成していくべきか、その前提と方向性はどのようなものか、自分たちはどのようにしてきたかを語り合うものとなった。本書はその実況中継である。

本書の名宛人は、現に法律実務に携わる人々、そうした職業に就くことを考えている方々を中心とするが、このテーマに関心を持たれるすべての人々に向けられている。多くの方々が手にとっていただければ幸いこのうえもない。

本書刊行の契機となる対談を企画していただいたNBL編集部の西巻絢子さん、櫻沢知広さん、本書刊行に向けて万端にわたりお世話いただいた商事法務コンテンツ制作部の浅沼亨さん、宮尾悠子さんの皆さんの情熱に対し、中村さんともども厚くお礼申し上げます。

令和8年4月吉日

加藤 新太郎

目次〔上巻〕

まえがき i

第1章 邂逅とキャリアの開始「新人時代」

I	接点① ジェイコム株式誤発注事件控訴審	2
1	本件の概要	2
2	教育者としての視点	8
3	弁護士と裁判所の信頼関係	11
II	ある第三者委員会での経験	17
1	事案の概要	17
2	スキルアップへの心がけ	20
III	弁護士懲戒案件での意見書作成	23
IV	キャリア選択の契機	26
1	中村弁護士のキャリア選択	26
2	加藤裁判官のキャリア開始	29
V	若手時代のキャリアの振り返り	33
1	中村弁護士の歩み	33
2	加藤裁判官の歩み	36

第2章 裁判官と弁護士、それぞれのキャリアの歩み方

I	裁判官の職・職層の特色と基本的資質	44
1	裁判官の基本的資質	44
2	裁判官の基本型——母集団の特性	45
3	裁判官のタイプと「矜持」	48
4	裁判官の日常生活	52
5	難しくもやりがいがある——裁判官の仕事	53
	(1) その特色 54／(2) 裁判官の中立性を考える 56／(3) 判断者としての「怖さ」 59／(4) 先輩と後輩、師匠と弟子 61	

II	弁護士の職層の特色	62
1	弁護士像の多様性	62
2	裁判官の「自由」	64
3	「裁判実務」という「ジョブ」	66
4	クライアントにどう選んでもらえるか	69
5	裁判官経験者が弁護士になってみたら	72
6	クライアントとの距離感	74
7	弁護士の価値観	76
8	監督者の不在	80
III	裁判官の特色——最近の傾向も	81
1	「主宰者で」「定年まで最前線で」「中立性が高く」 「注視される」存在	81
2	重い職責。心理的ストレスは？	85
IV	弁護士層の傾向	87
1	仕事のスタイルに変化が	87
2	採用時に「！？」となることも	88
3	より純粋な営利事業になってきた	89
V	どういう人がどの職を選ぶ傾向があるのか	93

第3章 キャリア・ディベロップメント——中堅期

I	裁判官の右陪席時代の課題と対応	98
1	まずは経験を積む	98
2	ストックとしての情報、フローとしての情報	100
3	自分のスタイルをつくる	106
4	合議判決（左陪席起案のもの）に手を入れる	112
5	一流の裁判官を目指す	114
6	視野を広げる・「部総括になったら」をイメージする	128
II	弁護士のキャリア・ディベロップメント——中堅時代	129
1	弁護士の新人時代——暗中模索の日々から「一人前の 弁護士」へ	129
2	最初の事務所の選び方	130

3	独立するかどうか	133
4	新しい分野に自分で挑戦できる	135
5	弁護士としての成長のきっかけ	137
III	裁判官の右陪席時代——加藤の経験から	143
1	大阪地裁の交通・労災専門部での勤務	143
2	釧路地家裁での勤務	150
3	司法研修所民事裁判教官・事務局長	154
IV	中村の中堅時代	155
V	右陪席時代における3つの陥穽と解決（回避）の仕方	160
1	右陪席時代における3つの陥穽	161
2	解決（回避）の仕方	163
3	人間関係と組織の問題——裁判所と法律事務所の比較	172
VI	弁護士のキャリア形成における問題点と克服の仕方	175
1	弁護士のキャリア形成における問題点	175
	(1) 自己決定権は機能しているか 175/(2) 自分で勉強できているか 179/(3) 自分の個性を出しているか 182/(4) 弁護士職務の陥穽と自律 186	
2	落とし穴を克服する——各論	191
VII	まとめ——汎用的スキルを応用するとどうなるか	195
1	汎用的スキルとキャリア	195
2	競争の存在と諸相	199

事項索引 204

目次〔下巻〕

第4章	キャリア・ディベロップメント——ベテラン期
第5章	キャリア・ディベロップメント——ベテラン期（管理職編）
第6章	裁判官と弁護士——キャリア形成のコア
第7章	裁判官退官後、弁護士の引退後の実相
第8章	司法修習が持つ意味
第9章	弁護士と裁判官の執筆活動